

裏面白紙

れた一連の行動には、上の原子爆弾の意味するものをよく認識している、というしは見られないのである。『憎むべき敵の指導者の裁判を注視することによつて起された、熱狂した感情は、世界連合の根本條件を考慮する余地を、殆んど残さないものである。』
『一つの些細なこと、すなわち裁判があまりに強調されることによつて、平和の眞の條件、に對する民衆の理解は増進することなく、寧ろ却つて混亂させられるであらう。』このように言われたのも、おそらく正しいであらう。

『この恐怖をもたらした疑惑と恐れ、無知と貧慾を克服する道を發見するため、平和を望む大衆が、費そうとする尊い、わずかな思いを、裁判が使用果してしまふことは許されるべきではない。』感情的な一般論の言葉を用いた、檢察側の、報復的な演説口調の主張は、教育的というよりは、寧ろ興行的なものであつた。おそらく敗戦國の指導者だけが責任があつたのではないという可能性を、本裁判所は全然無視してけなさない。指導者の罪は、單に、おそらく妄想に基いた、彼らの誤解にすぎなかつたかもしれない。かような妄想は、自己中心のものにすぎなかつたかもしれない。しかし、そのような自己中心の妄想であるとしても、かような妄想は、到るところの人心に深く染み込んだものであるという事實を、看過することはできない。正に次の言葉の通りである。

『時が、熱狂と、偏見をやわらげた曉には、また理性が、虚偽からその假面を剥ぎとつた曉には、またのときこそ、正義の女神はその秤を平衡に保ちながら過去の賞罰の多くに、その所を變えることを要求するであらう。』

E-1235